



PRO-LIFE NEWS

〔中絶に反対する運動〕

〒780 高知市新本町一丁目七番地三十一号

尊い命

私達人間は、二十世紀に入ってから、それまで思いもつかなかった程の多くの自然科学の知識を手に入れました。それに伴って、物が豊かに溢れる世界を作り出しました。しかしその代わりに、いわゆる先進国、特に日本は激しい競争の社会になってしまいました。人間は競争第一の社会の歯車になり、どんな成果を挙げて社会や企業に役立つかによって価値を決められるまでになりました。その結果、父親も母親も仕事のために家を開け、子ども達と一緒に食事をし心のふれあう話を交す機会も少なくなり、家庭は危機にさらされています。子ども達も塾やお稽古で、一歩でも仲間より前に出るよう強制され、友達

と共に遊び鍛え合うゆとりもなく、反動として、自分の壁の中にこもって楽しめる時間を求めていきます。子ども達こそ一番の被害者です。その最も極端な例として、医学の技術的進歩により、胎内の子どももの成育状態を知り、それに従って出産前に選別を行うまでになりました。科学技術によるそのような判定は必ずしも正しいものではないことは事実によって証明されているにもかかわらず、科学への盲信は、一人の人間の生命そのものさえも左右してはばからないのです。

一人ひとりの人間の扱いをこのような尺度で決める結果は明らかに現われています。今の世は、個人・家族だけではなく企業も国家も民族も、それぞれの存在の不確かさに不安を抱いて、追い詰められた緊張の日々を強いられています。それに打ち勝ち、真の平和を築くためにはお互いに「人間であることの尊さ」を認め合い、使い捨ての部品のように見放すのではなく、人間として大切にすることを心構え、従って生命を何者にも優れて大切にされる価値観を持たねばなりません。それが最も切に求められるのが、生まれ出る前の胎児と、何らかの原因で人生の終を迎えようとしている人の場合です。従ってプロ・ライフ・ムーブメントが目指している目的は、人間の尊さの認識なしには理解され得ないものなのです。

人は、地球上で一番優れた能力を持つのは人間である点に理由を求める人もいます。さらに、「神はご自分にかたどって人間を創られた」という旧約聖書の言葉を根拠とすることもできるでしょう。しかし現実には、これらの優れた力を使って人間は、自分の利益のためにはどんな恐ろしい醜いことでも今まで行ってきました。それは個人からあらゆる種類の人間集団、そして自然環境に至るまで、人間をも含めた五感で捉え得る全存在、特に生命に及んでいます。核兵器による無差別な破壊を止めようとの合意さえ作れないでいる程です。でも、キリストを信じる者にはもう一つの拠り所があります。人間のこれ程の弱点・欠陥にもかかわらず、神はすべての人間を、能力・言語・文化・

お祈りする次第であります。

安田 久雄

大坂教区大司教
信仰教育委員長

国籍・民族その他あらゆる違いを超えて一人残らず、ご自分の子とされます。そしてそれにふさわしい者とするためには、神にあるのに敢えて人間となりご自分の人間としての命を以てすべてを償ってくださいました。まさにご自分にとりかけがえのない大切なものさえも差し出す無私のお愛です。これにある程度比べられるのは、子どもへの親のお愛、すべてを与え合う夫婦のお愛ではないでしょうか。そしてこれ程までの愛を注がれる対象として神から選ばれているところに、人間の尊さの本当の理由があるのでないでしょうか。

それ故、プロ・ライフ・ムーブメントは、キリストが示された信仰なしにはまことの理解は難しく、日本では多くの困難の中におかれざるを得ません。神からの光と力を心より

中絶と第八の戒め

中絶は通常、十戒のうち第五の戒め「あなたは殺してはならない」の教えに背くものとされており、それはそれで正しいのですが、中絶が間違っている理由は他にもたくさんあります。それは、すべての戒めを破っていると言えるでしょう。

第八の戒めは、「あなたは隣人について、偽証してはならない」です。これは、例えば旧約聖書のスザナナの話（ダニエルの書第13章）のように、誰かが誤りを犯したと嘘の証言をすることだけではありません。隣人が誰なのか、その人がどんな価値や尊厳を持っているのか、そしてその人に対してどんな義務を自分は負っているのかについて、偽証

することを禁じているのです。

中絶における問題とは、単に「生命はどこから始まるのか」のみならず、より深く「生命の意味」を探ることにあります。人間であることの含意はどこまでなのか。人間の命は、それが望まれなかったり、不都合なものであったり、政府に認められるものでなかったりした場合には、勝手に処分してよいものなのでしょうか。特定の社会が決めた政策以外に、人命の認知や保護を求める動きがあるのでしょうか？そもそも人間の生きていく目的とは何でしょうか。我々は墓に入るために造られたのでしょうか、それとも天に召されるためでしょうか？

中絶は、ひとつの命を奪うだけではありません。生命についての、それも奪った命だけでなく、我々すべての命についての考えを示しているのです。その考えとは、我々はみな処分の対象になりうるということ。我々の価値は他人によって決められるということです。中絶は、徹底した保護を必要とするほどの尊厳は人命にはないとし、この世の向こう側に魂はないと言っているのです。

あなたは隣人について、偽証してはなりません！中絶は、このように人間について嘘をついています。一方、キリストは人命について真実を明らかにしています（策二回ヴァチカン公会議における現代の教会憲章第22章を参照のこと）。とくに、キリスト昇天によって、我々は天国のために造られたのであって、病院のゴミ

箱に捨てられるためではないということを示しています。

「私は思う、あなたがみ心にとめられるこの人間とは何者なのか。」(詩篇第8章5節) 詩篇の作者はこう問い、神自らがキリストをもって応えられました。願わくば、我々の人命に対する姿勢が、神のお答えを忠実に反映するものでありますように!

フランク・ペイヴオン
神父

聖霊を信じて

世の人々が協力しあって中絶に対する考え方を変えようとしている。そう語るポーラ・ヴァンデゲール修道女は、昨秋にオハイオ州で開かれた国際会議での代表演説者だった。シスター・ポーラはアメリカ国内はもちろん海外でも講師としてひっぱりだこで、十代の性とプロ・ライフ問題を

聖霊を信じ、神の御加護なくしては望まぬ妊娠に悩む女性を救うことはできない、というのが彼女の考えだ。

後に、あるインタビュー記事の中で彼女は、プロ・ライフ運動及びその関係者に向けて次のようなメッセージを送っている。

「アメリカで中絶合法化の話がもちあがった時、何とかしてプロ・ライフ運動の書物を広めようと思いました。まさか議会が承認するわけないと思っていたのに法案が成立してしまい、本当にショックでした。私達の国にとんでもない悪が野放しにされてしまったのです。中絶は安楽死にもつながりかねないし、とても不

演説の冒頭で「当初、プロ・ライフ運動はカトリックとモルモン教徒が中心となり、中絶への意識改革を目指していました。しかし現在は、多数のキリスト教団が手を取り合って女性に中絶以外の方法を与えるべく努めています」と彼女。

安です。人々の道徳観や価値観までも変えてしまいかねません。この件には全面的にかかわっていかねばならないと考えています。」

ピルの登場によりモラル崩壊が始まったと彼女は言う。「セックスは危険ではない、結婚相手以外と肉体関係をもっても傷つくことはない。ピルはこうした幻想を生み出し、世の中のモラルを変えてしまいました。最近結婚を前提としなくても避妊さえすればOKという風潮です。子ども達までも避妊することイコール責任をとることだと思っています。」

結婚相手以外とのセックスが安全だなんて、あり得ないのに。」

中絶がピルを陰から支えている。「もしピルで失敗したら、中絶という方法がある。皆心の中でそう思っているのです。」

シスター・ポーラは温和な語り口で、若い女性が中絶をする理由を挙げた。「大きく四つに分けられます。第一にポーフレンド。中絶しろって彼が。彼の言う通りにしないと嫌われちゃうから、中絶します」という人、また相手の男の子に腹をたてて「彼の子どもなんて欲しくないから、彼への復讐の意味で中絶するわ」という人、相手の男性が常に大きな要因になっています。」

「第二に家族との関係。お母さんには絶対言えない。きつと傷つくと思うの、私がセックスしたなんて知ったら」という少女の声をよく耳にします。」

「第三に、まだ本当の赤ん坊になっていない、と見なす考え方。」

「第四に、学業や仕事など社会的事柄を優先するため。」

人をむやみに裁いたりせ

ず、愛情をもって接する、それがプロ・ライフ運動を成功させる秘訣だと彼女は信じている。

米国では妊娠三件のうち一件は中絶されている現状だ。「妊娠初期での中絶なら許され、さすがにそれ以後は…」というのが大半の人の考えのようです。胎児の発育について誤解があります。人々が中絶に対してあまりいい印象を持っておらず、できるものなら他の方法を選びたいと思っているのは確かです。けれど私達は、他人に自分の考えを押しつけないよう、社会生活の中で教え込まれてきました。「他の人はOKでも自分は絶対だめ。そういう人がほとんどでしょう。」

キリスト教の各宗派が協力しあってプロ・ライフ運動をすすめている、と彼女は語る。「その力は世界規模です。共に祈り

働きかけ、聖霊も応援して下さいます。神の力添えがなくては胎児を救う運動も成し遂げられません。草の根運動から始まり、いず

れは社会的力となり得ると信じています。」

彼女は将来をどう予想しているのか？

「子どもを持たない人々が、今よりさらに増えるでしょう。あと十年もすれば、『性革命』も終わりを告げると思います。」

積極的には運動に参加しない、一般の人々にできることは何でしょうか？「祈ること。真の力となります。運動員も信徒の祈りに支えられていなければ全く無力ですから。」

キャロル・
カールマイヤー

退職者の活動：

教会は何ができるか

誰でも人の助けを必要とするものはあるものです。そのような状況にある家庭が、教会の中や隣近所、近くの街にたくさんあることでしょう。頭の中で考えることと、実際に行動してみることとは別です。そこで、教会がその考えをどんなふうに変えていくか、以下に記してみます。

1. あなたの地区のニーズを把握するために司祭に手伝ってもらいなさい。よくあるニーズとしては、約束の場所や教会へ車で送迎する、食品の買い出しを手伝う、などです。車を運転できない人は、手術後や産後の回復期にある人や、進行性の病気と闘っている家族のために

2. 教会の出版物（週報や月報など）を活用して、活動内容やボランティアが必要な地域を取り上げましょう。

3. ボランティアの募集は大変重要です。先程の教会出版物で、多くの人が集えば活動は活発化し、決して立ち消えになることはないことを強調しましょう。

4. ボランティアが集まれば、チームに分けます。例えば四チームに分けるとします。各チームがひと月のうち一週間を担当します。それぞれのチームにボランティアのコーディネーターが二名つき

ます。コーディネーターは、サービスを必要とする人からの電話を受けます。そしてボランティアと連絡をとり、そのサービスを提供できるかどうかを判断します。チームのメンバーと同じく、コーディネーターも月に一週間だけ活動します。

5. ボランティア全員をチームに配属し終えたら、あなたのグループが活動できることをみんなに知らせましょう。各コーディネーターの名前と電話番号を教会の週報に載せれば、サービスを求める人がコンタクトしやすくなります。初めは反応が鈍いかも知れませんが、次第に口コミであなた方のグループの存在が広まることでしょう。

教会内だけに活動範囲を限定する必要はありません。地域で求められていれば、もっと範囲を広げてもよいでしょう。活動に費

やす時間は多くとも月に二時間、少なければ十分くらいのこともあるでしょう。時間はそうかかりません。短い出会いから得る喜びは、測り難いものとなるでしょう。

CCLfamily founda-

tions7-8/91p11

父母の子どもへの影響は永遠

クリスチャンの親達が、現在、抱えている課題は確かに難しい。結婚の主たる目的の一つが、出産と子どもたちの教育、とりわけ宗教教育であることを彼らは知っています。

しかしながら、世の中のほとんどの人が彼らのこの努力を支援してはくれないことも彼らは解っているのです。実際世の中の教育宗教分離主義が、それに悪影響を与えているのです。

児童研究の専門家達は、子どもたちの成長や、のちの人生における行動や、性格形成などに、いちばん影響を与えるのは就学前の時期であると言っています。イエスス会の人達は何百年も前からこの

ことを知っているのです。だから、彼らの有名な言葉に、「七才までの子を私に預けなさい、そうすれば一人前にしてお返しします。」というのがあるのです。

両親は子どもたちがそこから学ぶ本のようなものです。幼い子どもでさえ父や母を絶えず観察し、彼らから学んでいます。子どもたちは両親によってこれから書き込まれる白紙のページのようなものです。そして両親が使うインクは消すことのできないものなのです。

それ故、子どもたちが人生の良きスタートを切ることが不可欠なのです。両親はごく早い時期にキリストについて子どもた

ちに教え始めたほうが良いのです。統計によると、世間で信じられていることに反して、父親が子どもの宗教教育に最も影響を与えることがわかります。幼い子ども達にとつて、父親は世界の中でいちばん権威ある人なのです。自分の親が祈る姿を子どもたちが見れば、その姿は永久的に子ども頭の焼きつきのです。

夜、子どもたちを寝かしつける時、寝入る前の10分か15分が子どもたちにとって一日で一番大切な時間だと、心理学者たちは言っています。子どもたちが話を最も素直に受け入れられるのはこの時なのです。この貴重な時間を利用して、子どもたちと語り合い、子どもたちの言葉に耳を傾けなさい。

ehrate Life 7-8/96p11

CCL-

中絶と身体障害者

数年前、健康な男の赤ちゃんが健康な二十歳前の両親のもとに生まれました。母親のお産は長時間かかり難産でした。しかし母親も赤ちゃんもそれをうまく切り抜け、赤ちゃんはその日生まれた他の赤ちゃんと同じように正常に見えました。

しかし数年後、この男の子は両目の視神経が極度に低下する病気であると診断されました。この病気の原因については、それが先天的なものであるとういうこと以外の説明は全くありませんでした。医者は両親にも十才になるまで状態が悪化しなければ、症状はたぶん安定し、一生そのままであるうと告げました。その男の子は視力障害者

と認定され、普通の大きな活字を読むのにも特別な眼鏡が必要でした。彼が運転免許証を取る資格が得られることは決してなく、スポーツ競技に参加することも不可能のように思われました。家族にとっても、友達にとっても、政府にとっても重荷になる可能性がありました。

中絶に賛成する人々に私はお尋ねしたいと思いません。それは、「どの時点で、この赤ちゃんの生命は救う価値がなくなったのか」ということです。もし、その赤ちゃんを妊娠したのが今の時代であれば、胎内で三ヶ月も経たぬうちに、超音波や他のデータを見て、この赤ちゃんに異常があると

いう診断がなされるでしょう。もし異常があれば、その子を中絶し、いわゆる「もう一回子どもを作る」ことを促すような方向で両親に知らせることが責任ある行為でしょうか。

あるいは、その子が生まれ、その子が最終的に社会の負担となることが分かった時点でその子の生命は絶たれるべきであったのでしょうか。あるいは、もっと話が変になりますか、同じ論理に従っていけば、その赤ちゃんが「正常」な状態に生まれ、十八才の時に事故で視力を失ったとすれば、「残念ですが、我々にはもうひとり分の資金がありません。十分な食料もないし、目の見える人々にさえ十分な仕事がありません。従って安楽死させることしか、私達があなたにしてあげられることはありません。」と

いうことが正しいでしょうか。私は、どの段階においても全ての人間に生きる権利があると信じています。なぜなら、私が一九七五年に生まれたその赤ちゃんだったからです。私が視力障害者になったのは恐らく出産中の何らかの出来事が原因だったのでしょうか。多分、長時間に及ぶ分娩中に圧迫されたためか、医者が使用した鉗子が原因なのか、その原因は神のみぞ知るところです。それが神の意志なのかどうか考えるのではなく、私にとって大切なことはそれにどう対処するかということ。 「ローマ人への手紙八章二十八節」の中の、神は、私達が絶望するような状況から善き事を起こさしめるすべを持つておいでになるということ。私達が固く信じています。私が身体障害を克服できたのは神の慈悲のおかげだったと本当に言うことができます。

身体障害を克服することはたやすい事ではありません。神様から享受することを許された成功を成し遂げるために、私は普通の人よりもはるかに努力をしなければなりません。私は諦めるつもりも、わたしが暮らしていくために他の人の重荷になるつもりも全くありません。

私は持ち家に住み、私の収入で家族を養っています。妻は数年間養護学校で教鞭を取っていましたが、今では家庭でもっぱら幼い三人の子どもの面倒を見ています。私はコンピュータプログラマーとして職に就き、ミラーズビル大学で自然科学の分野で学位を取りました。最初はドイツ語の人文科学の学位を取りました。ドイツ語は、

大学三年の時、ドイツの
マールブルグ大学で勉強
した結果として流暢に話
せるようになった言葉で
す。私は教会にも積極的
に関わってきましたし、
地域社会の様々な委員会
でも仕事をさせていただ
きました。私は盲人に対
する社会の固定観念に挑
戦するためにたくさんの
事をやってきました。で
も、それら全てにおいて

私は神を信じ、私がこれ
らのことを成し遂げるこ
とができたのは神のお陰
だと思えます（コリント
人への第二の手紙十章十
七、十八節）。

私は生き延び、成功談
話を語ることができま
す。毎月、四千二百人も
アメリカ人の胎児が親の
都合や金儲けのために殺
されています。もし私の
人生は、盲目であるため
に生きるに値しないと
思っているなら、他の障
害のある人がその能力の

限界のために価値が少な
いと思う人がいるなら、
または、胎児は子宮の中
にいて目で見ることで
きかないから、人間らし
さが乏しいと思う人が
いるならば、そのような
人にとって貴重なもので
ある（詩篇一三九編十三
十七節）ということと思
い起こさせたいと思いま
す。

そういう訳で、盲目の
コンピューター技術者で
ある私は中絶を止めさせ
ることに大きな関心を抱
いているのです。今日ま
で十一年間、妻と私は空
いた時間をほとんど「し
たいときにいつでもでき
る中絶」と戦うために
使ってきたのです。この
ように胎児のためにつく
すことによって、私は人
に伝えていくことが大切
だと思われる悟りを手に
入れたのです。

これは私の仕事ではあ
りません。胎児のために
私がしていることに対し
て、私はお金をもらって
いません。しかし、私はキ
リスト教徒であり、私は
イエス・キリストのよう
にありたいと思います。
私はイエスが重要だと思
うことを重要だと思いた
いし、イエスと同じよう
に悪に立ち向かっていき
たいと思います。

言葉においても、行動
においても、主に従うた
めに共に立ち上がる一般
の普通のキリスト教徒こ
そがわが国の合法化され
た子殺しを終わらせるた
めに必要とされているの
です。しかし、私達キリス
ト教徒が「死地にひかれ
る人」（格言の書二十四
章十一、十二節）を守る
ひとりの責任を真剣に考
えなければ、人間の生命
は生存に適した者たち
にとつてさえもあまり
にも安っぽいものになる
でしょう。私達の役目が

何であれ、私達の影響力
がどこまで及ぶにせよ、
私達は皆、人間の生命の
尊さを守るためにもつと
多くのことをなしようと
いうことを認めなければ
なりません。

私が祈りたいことは、
神があなた方にそのすべ
を与え、あなた方を目覚
めさせ、中絶や子殺しや
安楽死で生命を失ってい
る者への正義を回復させ
るために意義あるもう一
歩を踏み出すよう働きか
けてくれることなのです。

エドワード・
ハーシュ

『自分の家庭と心を開放する』

私たちがスージーに会った日、彼女は内向的で、自分が誰であるか、また私たちがどういう人間であるかについてまったく確信できないでいました。彼女はのちに、なぜ全く知らない家族が、その家庭を自分のために開放してくれるのか不思議でしかたなかったと打ち明けてくれました。彼女は、私たちに何か隠れた動機、あるいは秘密の話し合いがあるのではないかと思っていたそうです。

私たちは彼女と一緒に住もうと招待しようとした時のあの不安と緊張を覚えています。彼女はものすごくもろく見えませんでした。肉体的にも感情的にも。妻と私は会話の間中、軽率な言葉や場違いな態

度が彼女の感情の微妙なバランスを悪い方向へ傾けてしまうのではないかと、思い、ずっとびくびくしていました。

二回目の妊娠の時(彼女にはすでに息子が一人いました)、スージーは家族の不安や両親の負担を軽減させるために、赤ちゃんが生まれるまで家を離れることを決心しました。スージーのお母さんは、スージーの居られる場所を捜すために危機妊娠センター(crisis pregnancy center)に連絡を取りました。このセンターは、妊娠した若い女性のために、「導きの家庭(shepherding homes)」として奉仕することを希望しているクリスチャン家庭のリストを用

意していました。たいていこのような女の子たちは、赤ちゃんが生まれるまで居られて、人生を整理するための貴重な時間を与えてくれる場所を必要としています。自分の娘が妊娠したというニュースを聞いてショックを受けた親に家から蹴り出される場合もあります。また、ボーイフレンドと一緒に住んでいたほかの女の子たちは、もう愛されていないと悟る場合もありました。もちろん、今まで愛されていた場合にもありますが。

私たちは、導きの家庭のリストに何ヶ月か前から載っていたにも関わらず、スージーが私たちの最初のゲストになりました。スージーが来てからほとんど経たないうちから、彼女の態度に明確な変化が見られました。段々と彼女が私たち家族の決ま

りになれていくうちに、彼女は自信と安定さを増していきました。十代の子が二人と十代前の子が一人いて、家事をちゃんとするために、そんなに一家内に決まりがあつたわけではありません。私たちの忙しい生活に合わせ、スージーは次第に彼女の持っていた葛藤について忘れるようになりました。彼女は自分の家庭で成長する上で受けたプレッシャーについて、私たちに話してくれるようになりました。そうしてくれ

るにつれ、私たちは彼女をより深く理解できるようになりました。彼女は、実家の人が望むレベルまで達する事が出来ないと感じていました。以前の家は今の家のように、自分を理解してくれなかつたと彼女は考えています。彼女の母親が遠回しなやり方で、私たちにスー

ジーの今までの問題を話にきました。しかし私達は彼女の過去の問題を聞いても、彼女への印象を変えないようにしようと思決心しました。何よりもまず、スージーには真新しいスタートが必要だったので。

彼らは、スージーが独立するための手助けになるように、参加可能な社会事業の広大なネットワークに彼女を登録する手続きを取りました。彼女はもう十代をとくに過ぎています。いい加減自分の力で成功するなり、失敗するなりすべきだったので。この若い女性が、罪の意識に悩まされ、今にも崩壊しそうな状態から、たった数ヶ月の間で、責任感のある大人へと変身するのを私たちは驚きで見つめていました。導きの家庭としての私たちの初めての経験は、私たちにとつても大きな

恵みでした。この若い女性の居心地をよくするために私たちの捧げた時間や努力は見事に酬われました。スージーの変身に一役買っただけでなく、落ち着いた環境を与えることによつて、スージーに自分の子どもにとつて一番良い決断を下す機会を与えることにもなりました。妊娠センターのカウンセラーの人たちと会つた後、彼女は自分の赤ちゃんを養子縁組に出す決心をしました。彼女はすでにいる息子に関心を集中したかつたのです。

いくつかの夫婦が赤ちゃんを養子にしたいと言つてきました。スージーは彼女の家族と長年付き合ひのある夫婦を選びました。

スージーは美しい男の赤ちゃんを産みました。その子は今、彼の養家に喜びをもたらしています。

政府の与えてくれる家

を待っている間、スージーは妊娠センターの用意してくれたアパートに移りました。妻と私は、いつでも私たちと接触が取れるように、私たちの地域に住んでくれることを望んでいました。できたら毎週の教会仲間としてでも。私たちは、彼女がこれからきつと直面するであろう困難な時を迎えるとき、そこに一緒にいてあげられるようにしたいのです。

結婚21年目の安定さと、三人の子どもを育てた経験と、余分な寝室と、たくさんの愛を伴つて、彼女とこのような関係を持つようになりました。私たちが個人的に一人の赤ちゃんを救つたという満足感、そして本来ならば希望もない若い女性に明るい未来への望みを与えることができたという満足感を私たちは得ることができました。

あなたは直接、中絶反対運動をする事が出来な

いかも知れないけれど、もしあなたの家庭と心を開放する意志があれば、二つの命に深く確実な影響を与えることができるのです。

バリー・ローレンス著